

# サイバー専門家への 道を開いた一本の論文

——サイバーセキュリティ・ストラテジストとは、どのようなお仕事ですか。

**松原** サイバーセキュリティに関する情報の対外発信が主な役割です。サイバーセキュリティの第一歩は、社会を構成する皆さん一人一人の意識向上と、基本的な防御から始まります。私たちの経済活動・社会活動がこれだけITに依存している以上、一般人の方々にもサイバー攻撃の現状とサイバーセキュリティの大切さと基本を理解していただくはずして、サイバー攻撃から社会を防御するのは不可能です。講演やセミナー、近著『サイバーセキュリティ』や東洋経済オンラインなどへの寄稿を通じ、経営者や政府関係者、一般の方々に至るまで多くの方々に対し、技術用語を



まつばら みほこ

早稲田大学卒業。防衛省で9年間勤務後、米ジョーンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院に留学し修士号取得。その後、米シンクタンク研究員などを経て現職。近著に『サイバーセキュリティ 組織を脅威から守る戦略・人材・インテリジェンス』（新潮社）。

排し、噛み砕いてサイバーセキュリティの基本について共有したいと考えています。

その他にも力を入れているのは、海外への発信です。海外の政府や企業、シンクタンク、大学などに、日本の施策やNNTの取り組みを伝えています。最近生まれている画期的な企業間連携や新しい対策などを英語で発信し、日本への関心を高め、国際協力の強化につなげるのが狙いです。

——なぜNNTへ？

**松原** この業界には多くの企業が参入していますが、社会一般に対しサイバーセキュリティの知見を共有するための専属チームを営利活動とは切り離れた形で設けているのは、日本でおそらくNNTだけです。二〇一四年に発足後、

積極的に国内外で発信してきたこのチームに加わり、ぜひ日本に貢献したいと思いました。

## 「誰がこの論文を書ける人いない？」に立候補

——松原さんは防衛省でキャリアをスタートされました。

**松原** 大学卒業後、九年間勤めました。国際安全保障を勉強し、専門性を高めて日本の安全保障に貢献したいという気持ちで次第に強くなり、大学院への進学を決心したので。国際安全保障を学ぶなら国際的な環境に身を置いて知見と人脈を得るべきだと考え、フルブライト奨学金を得て、二〇〇九年、ワシントンDCのジョーンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)に留学しました。安全保障という分野の性格上、政府機関や国際機関、シンクタンクが集まるワシントンDCは、とても魅力的でした。

——そこでサイバーセキュリティを専攻されるのですね。

**松原** いや、実はそうではなくて……。今でこそサイバーセキュリティの学位も珍しくありませんが、当時サイバーセキュリティはそこまで一般的なテーマではありませんでした。その状況が一〇年に大きく変わります。年の初めに、当時のクリントン国務長官が、中国からのサイバー攻撃に對して強い懸念を表明し、主要紙で大きく報じられました。

サイバー攻撃の脅威やサイバーセキュリティの重要性が広く論じられる大きな契機となったのです。

その直後、アジアの国際政治や安全保障を扱っている米専門誌がサイバーセキュリティを取り上げることになりました。編集者である同級生が「アジアのサイバーセキュリティについて今すぐ書ける人、誰か知らない？」とたまたま私に尋ねたのです。

実は、米滞在中に署名入りの論文を必ず書くという習慣から目標に掲げていました。これは千載一遇のチャンスと思い、「私が書く！」と立候補したわけです。この論文を出せたことが、その後のサイバーセキュリティでのキャリアづくりで大きな転機となりました。

——といいますと？

**松原** これを含めた論文のおかげで、卒業後、ホノルルのシンクタンク、パシフィック・フォーラムCSIS(当時)でフェローになり、日米のサイバーセキュリティ協力について研究できました。ビザの関係で滞在は一年弱でしたが、英語での執筆活動が続けられたのです。

ホノルルでは、論文執筆に加えて、日本でも増え始めたサイバー攻撃に関する新聞報道を英語でまとめ、米国のサイバーセキュリティ関係者に自主的に提供していました。

そこで得られたご縁がその後の仕事につながったのです。

——大学院での勉強はいかがでしたか。

**松原** 帰国子女ではないため、英語での議論も論文も苦勞の連続でした。防衛省在職中は海外とのやりとりでほぼ毎日英語を使っていました。特殊な軍事用語に語彙が限られていました。しかし大学院の授業は当然のことながら、語彙がより豊富ですし、中身のある発言をして授業に貢献しなければ評価されません。皆が積極的に発言を求め、丁寧な発言のやりとりが続きますが、最初は拳手して発言するタイミングがなかなかつかめず、衝撃を受けました。

このままではいけないと思い、最初の授業が終わった後、各クラスの教授全員と面会し、「日本での知見をクラスで共有して貢献したいのだが、第二言語の英語では発言のタイミングを取るのがままなりません。次回から私を最初に指名していただけませんか」とお願いに行きました。ありがたいことに、どの先生も「わかった」とおっしゃってくださいました。授業中に私の方をチラチラ見ながら、発言の機会を設けてくださるようになったのです。そのうちコツをつかみ、発言しやすくなりました。

また、同級生たちから受けた親切も忘れられません。みな睡眠を削り、毎日十数時間勉強しなければいけない

いほど忙しいのに、わざわざ時間を割いて私の下手な英語を添削し、プレゼンテーションの準備につきあってくれました。素晴らしい教授や友人にSAISで出会えたことは一生の宝物です。国際関係や安全保障に情熱を傾け、世界で活躍する友人たちから今でもよい刺激を受けています。

——多くの方がサポートしてくださったのですね。

**松原** もう一つ助けられたものがあります。それは、数学者・作家の藤原正彦先生がお書きになられたエッセイ「学問を志す人へ——ハナの手紙」（新潮文庫『数学者の言葉では』収録）です。ハナさんは、藤原先生が一九七〇年代にコ罗拉ド大学で教鞭をとられていた時の教え子です。先生は、大学院で数学を学ぶハナさんのエピソードを紹介しながら、学問を志す上で必要な四つの性格条件を記されています。曰く、「知的好奇心が強いこと」「野心的であること」「執拗であること」「楽観的であること」。行き詰まったときや節目節目に読み返し、心を奮い立たせてきました。

## 二〇一〇年以降に向けて

——二〇一二年に日本に戻られ、サイバーセキュリティの仕事に就かれました。

**松原** 日本ではサイバーセキュリティに技術系の仕事とい

う印象が強いかもしれませんが、欧米では社会科学的事事も多くあります。サイバー攻撃やサイバーセキュリティを安全保障や地政学、政策的観点からも分析する専門家が多くなります。語学力や文化的理解も求められます。また、実効性のある取り組みには民間企業の協力が不可欠であり、技術に加え、ビジネスに関する知識や金融、法律などの幅広い素養も必要です。

日本に帰国後、日立システムズでサイバー脅威インテリジェンスの仕事に携わりました。技術的・社会科学的な観点からサイバー攻撃を分析し、防御に活かし、情報発信する日本国内外の専門家から学べる貴重な機会であり、感謝しています。多岐に及ぶサイバーセキュリティの仕事のおもしろさや悩みは、著書でも強調したかった点の一つです。

—— 今後、どのような点に力を入れたいですか。

**松原** 東京オリンピック・パラリンピックが二〇一三年に決定して以降、日本でもサイバーセキュリティに対する関心は非常に高まってきています。一方で、技術的な専門用語が多いため、取っつきにくさを感じる方も多はずです。私は今までに日本政府、米国シンクタンク、米国企業と日本企業で働いてきました。この経験を活かし、言語や文化の壁を越えて一般向けにわかりやすい情報発信を国内外で

もっと進めていきたいと考えています。

—— 若い読者に向けてメッセージをお願いします。

**松原** この雑誌のテーマである外交には、国と国、組織同士の関係に加えて、人と人との信頼関係も不可欠です。草の根のレベルで信頼醸成や相互理解を促進する「外交」には、誰もが関わられます。

その際に大事な点は、三つあると思います。一つは専門性を獲得し、問題解決に役立つことです。ただし、何がいま解決すべき、あるいは貢献すべき問題かを見極めるには、二つ目の大局観が求められます。それには若いうちからの膨大な読書が必要であり、加えてたくさんの人に会っていろいろな見方を知らなければなりません。

三つ目は、ユーモアです。解決しなければならぬ問題は、一筋縄ではいかない難しいテーマだらけです。もちろん場にに応じて使い分けが必要ですが、ユーモアは困難な状況に余裕を与えてくれます。そして、いかにもいっぱいっぱいの人より、余裕のある人の方が頼られるものです。

サイバーセキュリティを含め、さまざまな分野で信頼構築・相互理解促進の懸け橋になれる人材が求められています。ぜひ、若い世代の方々に「外交官」として活躍していただきたいですし、心から応援しています。●